

# 埋もれた 婦人運動家(7) 高橋くら子

——長野県水平社創立期に活躍したアナ系婦人闘士——

柴<sup>しば</sup>田<sup>た</sup>道<sup>みち</sup>子<sup>こ</sup>

(児童文学者)

偶然が人間をとらえる。高橋くら子の短い生涯を思うと、私はこのことをしみじみ感じる。くら子の面影を追えば追うほどに、平凡なひとりの女にゆきあたる。くら子自身が書き残したものは少ない。私はくら子像を、先年からつづけている古老聞き取りの思い出話の中に、かたちづくった。多くの人の主観をとおして、くら子のたどった道すがらを、可能なかぎり客観化してみたいと思う。

長野県小諸市加増荒堀(旧北大井村大字加増字荒堀)は、県下で一番大きい被差別部落である。荒堀は都市化が進む中で、市の中心地に入ってしまった。現在は二百戸近いが、くら子が生まれた明治四十年頃は、百戸くらいであった。

明治の解放令はたてまえとしては身分制度を廃止したが、それによって部落の人々のこれまでの仕事を奪った。近代日本は、部落に仕事を保証しなかった。今日なお部落の人々のいつさいを規定しているのが、この仕事が無いということである。長い間の迫害と差別の最たるものは労働を与えられないということであった。古老たちは、「仕事がせつなくて泣いたことはない、仕事が無く泣いた」と語っている。

高橋くら子は、荒堀では数少ない分限者の家に生まれた。祖父重太郎の代から皮屋と、食肉店を経営していた。小重の長女であり、弟が一人(利重)の二人姉弟であった。母つねは、小重より十六歳年上である。小重はよく出来た人で、二人の子どもたちを、水平運動に学生時代から参加させ、自分は経済的な

援助をおしかなかった。

くら子は、家庭では何不自由なく育った。大正三年四月一日、差別は小学校(北大井村)にあがったその日から、彼女に降ってわいた。ハチョオリッポのくせに、いい着物きてハチョオリッポのくせに、この言葉は、くら子の心臓深くつきささった。その意味の何かを知らぬ頃から、くら子を意地にさせたのは、この言葉である。またハチョオリッポのくせに、物を語る部落外のすべての人々の、友達教師の、まなざしであった。

戦前の子どもたちにとって、直接の迫害は入学と同時にじまっている。部落外とはじめてふれる時から地獄を這わされるのである。両親のもと、かざられた村内では、幼児にとって部落差別は見えない。大方の両親が失業状態にあり、当時小学校を卒業できる女

子はめずらしかった。みな中退して、糸とり(製糸工場)にやらされる。当時の親は女の子が生まれると喜んだという。男の子は小僧の使い手もなかったから。

六十歳以上の大方の人は小学校を中退している。貧困の理由もあるが、学校生活での差別にたえられなかったという理由のほうが大きい。くら子が小学校を卒業し、それも一年から六年まで首席をつらぬいたことは、彼女のしんの強さ、はげしさを物語っている。成績がずばぬけてよかったので、教師のすすめもあり、両親も望んで、小諸高等女学校に進学した。

村から女学校に入学したのは、くら子をはじめである。もちろん村中の話題を呼んだ。それ以上に村外の話題となったが、そのほとんどは、中傷と非難の言葉であった。彼女は進学によって、さらに差別の嵐と闘うことになった。

くら子は村内の子どもたちの中でも、めぐまれた頭脳を持ち、めぐまれた家庭に生まれた。この環境は、彼女に生きる上で意地を張らせ、あるいは意地を張ったように見える生き方を強いた。

負けずぐらいで同時に情にもろいくら子の

側面は、くら子の一部にすぎない。これは長所でもあり、同時に短所にもなった。くら子を見る目の、あまりにもかけはなれた違いに、私は驚くと同時に、そのことが問うている人間くら子の像に迫ってみた。

小学校時代の同期生たちは、「すごい頭の良い人で、美しく、くらちゃんて、こわいみたいな人だった」ともらす。彼女はすぐれた子どもにならねばということ、早くから自覚した。持って生まれた頭脳と環境が、そうなることを可能にした。村内の子とはちがうんだ、ましてや村外の子とは違う、この引き裂かれた不安定な存在をくら子は生きた。

「くらちゃんが通るよ」

通学路にあたる県道はたの家なみから、声が聞える。紫のはかまに、四季おりおりの上等の着物を着たくら子は、おさげ髪にあみ上げ靴という流行の女学生姿である。彼女はいつも背すじをしゃんとのはし、頭をあげ大胆に歩いた。小柄なくら子だったが、実物より大きく見えたという。

小諸女学校に入学したのは大正十年、卒業は大正十四年であるが、四年間、ここでもく

ら子は首席を誰にもゆずらなかつた。くら子のために二番を余儀なくされつづけた友達のアさんは、非常にくら子をきらった。くら子は一番と二番の差をあざやかに引きはなしていたので、教師も成績上で部落差別の仕様がなかつた。よく聞くことであるが、首席で卒業した部落の子が、総代を二番の部落外にゆずられたという話がある。

大正十四年の小諸女学校卒業総代は高橋くら子である。知事賞をはじめ、くら子は両手にあまる賞状をもらって卒業した。この時「チョオリッポのもらった免状など汚なくてもらえません」と同級生は声を大にして校長に訴え出た。しかし校長は「くら子さんの受け取った免状をもらいたくないなら、みなさんはもう一年、四年生をやりなさい」と答えた。くら子は学窓において、最後の最後まで、同級生全員から迫害された。

くら子が女学校でも首席を守りつづけられたということよりも、卒業できたことに、彼女の不屈の精神の中に、死に狂わんばかりの恨みと、底知れない悲しみを想像する。己れを守るために、生きがために、しっかりと自分の殻にとじ込んで、かたくなにがんばったくら子の学校生活がある。彼女は、小諸女

学校で一人の友達もつくらなかった。

卒業式の日に必ずといってよいほど起きる部落の子どものたちの部落外の子にむける暴力は、人間であることの証しとして、痛みをもつて訴えている。古老たちは、「卒業式の日には、免状をにぎったらやつらを思いっきりこらしめてやるぞと、にえくり返る怒りを毎日おさえて六年間、学校へ通ったものだ」と私に語って聞かせている。

くら子が二年生の春、大正十一年三月三日、京都市岡崎公会堂で、全国水平社の創立大会が持たれた。日本人の人權宣言といわれる歴史的な水平社の宣言は、「長い間虐められて来た兄弟よ」と呼びかけ「人間の世に熱あれ、人間に光あれ」と結んでいる。三百万の兄弟の魂をふるいたさせた宣言は「おきてみる夜あけだわれわれは人間である。ケモノの心臓を裂く代価として、暖かい人間の心臓を引裂かれる社会に、人間として闘う」ことを全日本人に誓ったのである。

長野県では、大正十一年十一月十日全国水平社の影響をうけた小山薫(雨宮)、朝倉重吉(小諸)氏らによって雨宮水平社創立大会がもたれた。朝倉重吉氏が中心になって翌十三年の第三回全国大会には、小諸、佐久の中心的

活動家が多数参加した。

県下の全域にわたる活動開始という意味から長野県の水平社創立大会は、大正十三年四月二十四日の小諸高砂座のものが創立大会と呼ぶにふさわしい。

くら子が小諸高女の四年生に進級した十七歳の年である。朝倉重吉は、長野県水平社創立大会の準備にあたって、早くから頭のいいくら子姉弟に目をつけていた。父親小重を説得し、くら子と利重を創立大会参加にオルグした。小重は二つ返事で自分の協力は約束したが、まだ在学中であり一人娘のくら子を、創立大会の弁士として出すことには抵抗があった。しかし朝倉の強い要望と、くら子の積極的な意志をとどめるものがなく、小重は姉弟の水平運動参加をゆるした。

「わたしたちは差別されるいかなる理由もない。起きてみる夜あけだ」という朝倉重吉の言葉を、女学生のくら子は感動をもつて受け止めた。はずかしめにじっと耐えに耐えてきた祖母の母の血潮が己れの中で高鳴った。くら子は父のところに重吉がおいていった、水平社の宣言と綱領を何回も何回も読みかえした。第二回全国大会の決議に、全国少年婦人水平社の設立がうたつてある。くら子は体中

で答えてくる魂の呼びかけを、本当の己の声をはじめて聞く喜びを味わう。

3

いよいよ長野県水平社創立大会の日が近づく。くら子は、大会準備を何一つ手伝わなかつたが、村中がこの大会にむけて躍動していくのを感じた。村内はもとより、村の外のさわぎは一層かしましくくら子の耳に入ってくる。学校ではわざわざくら子に近寄ってきて話しあう。

「水平社というおもしろい社ができるぞうよ」

「チョオリッポがつかくるんだってねえ。あきれれるわねえ。でかいさわぎになるぞうよ。受持ち(警務)が、近よるなって、ふれてまわつてるとよ」

「水平社って金持をへこまして、貧乏人と平にするつちゅうこんだって、大尽公はおそれとるのよ、チョオリッポがさわぐなんて、面白いじゃない」

くら子は、いつものように堅い顔をしていった。しかし心の中はいつもと違って、悲しみやくやしきばかりではない。「人間の血は枯れずにあつた」ことを彼女らに知らしめてや

る。自分が解かれていく喜びが一瞬体中をよぎった。くら子は弁士として民衆の前で何を訴え語りかければよいのか、頭の中はいっぱいだった。

ある朝、登校しようとしたら家の出たくら子の目に飛び込んできたのは、各戸にはられた大きなポスターである。「待ちに待った長野県水平社創立大会! 於小諸高砂座四月二十四日午前十時! 長い間いじめられてきた兄弟よおきてみる夜あけだ!」

それにつづく沢山の弁士の名の最後に「婦人水平社少女闘士、高橋くら子」とある。くら子はびっくりした。

「われわれに反対する者は、ぶつ殺す!」というはげしいポスターもある。その日学校では、おそろしいほどの沈黙と、冷たい目ばかりの子を待っていた。午後になってやっと「くら子さんが高砂座に弁士で出るんだってねえ! いつもは話もできんとすました顔していても、おそろしいことやらかすねえ!」

しかしくら子の心は、もうどんな言葉にも動じなかった。とうとうその日が来た。大会準備の中心は、朝倉重吉であったが、他に加増の高橋森太郎、善十郎、二郎、滝司、秀市が大きな役割をした。当日朝十時、晴夫のも

と、加増部落からは、各戸一人を動員、田口村三反田を中心に、南佐久全域から四百名の人々が結集した。前日から泊り込んでいる人もあった。中央からの応援弁士(南梅吉米田富、平野小剣、泉野利喜蔵、深川武三、輪寿社、宮崎竜介、布展辰治)は、滝司宅の二階に泊っていた。県内から来た、林虎雄、野溝勝の応援弁士は善十郎宅(太鼓屋)の二階に泊った。そうそうたるメンバーである。くら子の家の離れにも何人か泊った。

会場は感動と熱気でむんむんしていた。くら子は学校を休んで大会に参加した。壇上には、白いさらしに、大きくきざんだ弁士の演題と名前が何本もさがつていた。綱領も高々とかがげられていた。

一、吾々特殊部落民は部落民自身の行動によって絶対の解放を期す

一、吾々特殊部落民は絶対に経済的自由と職業の自由を社会に要求し以て獲得を期す

一、吾等は人間の性的圧政に覚醒し人類最高の完成に向かつて進歩す

この日くら子は二、三十分くらい話した。二歳年上のくら子の従弟である高橋角市氏はくら子の演説について、語っている。創立大会の内容はやや観念的であったが、回を追う

ごとに演説がうまくなった。自分の差別された苦しみや悲しみを、訴えていたという。女学生姿のくら子が壇上に立っただけで婦人たちは目がしらをおさえた。人間であること、声を高らかにいうことができるのだ、そうすべきだという確信を水平運動は婦人たちにも確固として教えた。その喜びと感動をかくすことができない。

幾世代にもわたって受けた迫害、人間以下の人間とさげすまれた屈辱をはねかえす部落民衆の力は、休火山が突如爆発した時にも、天地を引き裂く激烈さであった。弁士は自然と過激になる。

だがくら子の時だけは、さすがに警官も「弁士中止」を出せなかったという。婦人がこうした運動をすることは、村内の男たちでさえ驚きであったという。

くら子の声はよくとおり声量もあり申し分なかった。何よりもものおじしないくら子の勇氣とけなげさが、聴衆の心を打った。くら子は、高砂座の長野県水平社創立大会を皮切りに、県下で開かれる水平社大会には、ほとんど出席している。いつも婦人弁士としてであり、紅一点の貴重な存在であった。婦人活動家としては関東でも、くら子の右に出る者

はいなかつた。彼女は群馬、埼玉と、朝倉重吉につれてきて弁士として活躍し全国大会にも参加している。講演のある日は、学校を休んでいた。

くらの演説を聞いたことがあるという人は口々に「声がきれいだったのが印象にのこっている。弁舌さわやかだった。美しい人だった」という。晩年の不幸と短い生涯は、くらの子を「美人薄命」にした。しかしこの「美しい人」というのは問題があるようだ。親しかった水平社の同志たちは、くらの子を美人じゃあないと否定する。写真を見るかぎりでは、ひきしまった大きい口で、切れ長の目は個性である。水平運動の中では一番年長であった、高橋市次郎は、「くらは美人とはいえないが、ひとたび演壇に立つと大変立派に美しくみえたものだ」といっている。

小諸女学校時代のくらの子を知っている学友は、冷たくて虚勢の強い人というが、水平運動の中では、くらは子は、ざっくりばらんで、明るく気さくな人といわれている。くらは子は運動の中ではじめて己をひらいて生きることができたのだろう。父のところへ借金のいいわけに来る人をよくかばっていたという、やさしさもあった。

新聞報道は演説会の模様を次のように報じている。  
「朝倉重吉氏の△支配階級のカラクリ▽の講演中、資本家の事言ひ及ぶや出席の署長に注意さる所あり……熱弁に村民は感じいったが、殊に紅一点の高橋くらの子の処女演説は民衆を感動させ風彩を放った」

水平社の闘争の理論はまだ確立していない当時は、「権力とは何か」という問題は、まだ暗中模索の状態であった。そして因習と闘い、自己犠牲のなかで、子孫の代における解放を願った。子どものケンカから同盟休校とは、と今日では驚く人がいるかもしれない。部落の子弟にとっては学校が差別の修羅場であった。教師も校長も「チョオリッポがチョオリッポといわれて何故悪い、校長が校長と呼ばれるのと同じだ」という差別の野放しがあり、水平社を立ちあげさせたのである。

県下では、五月一日須坂事件、十月五日、協和村事件とその他にも、個人的糾弾は、三日とあげずに起きたといわれている。個人的糾弾は部落の人々の自覚を高める初歩的な闘争形態として必要であったが、「差別に対する観念的な糾弾」「人民大衆からの孤立」「部落第一主義」という否定的評価も認め、全国水平社は個人的糾弾闘争と階級闘争との結合

長野県水平社が創立した大正十三年秋、九月二十一日には、埼玉県深谷町小口製糸工場内食堂で開かれた、婦人水平社に彼女は参加した。新聞は「少女闘士、高橋くらの子さん（十八歳）も婦人水平社の努力に酬いべくわざわざ来援下さった」とつづけている。応援弁士としての行動はいつも朝倉重吉と一緒だった。小諸高等女学校の最終学年である大正十四年の、くらの子の活躍はめざましいものになる。

県下でも水平社が出来る、差別事件がにわかに顕在化し、くらの子も演説会に忙しく飛び歩いた。差別事件が起るたびに演説会がひらかれるからである。長野県水平社は佐久地方を中心に東信に勢力をのびし、信濃同仁会は上田市を中心に、北信に勢力を持っていた。大正十四年二月十五日、第三回関東水平社大会に先き立ち、群馬郡同人一同の主催する群馬郡水平社創立および関東演説会が、高崎市高崎劇場で開催された。そのチラシによるよびかけの言葉と弁士名である。

悩める者へ起す  
自己ヲ滅ボシ国ヲ滅ボス因襲ノ悪魔ト戦へ  
水平運動ハ人ヲ滅ボスニ非ラズシテ人ヲ救ハント  
スルモノナリ、立テ自己ヲ愛スルモノハ

をはかる。水平運動の前進に、理論的基礎をあたえたのは、全水第四回大会（大正十四年五月七、八日、於大阪中の島公会堂）であった。この大会は活動家に階級意識をうえつけた。労農団体との提携が出されている。

十四年三月にくらは子は、小諸女学校を卒業した。弁士としての活動のない日は、家で近所の仕立仕事をしていた。金銭には不自由なく、大会出席費用は、父が出していた。くらは子は、たいへん手先が器用で、字もうまく、裁縫は得意であった。何をしても、そつがなく、口八丁手八丁で、弟利重の妻は、おそろしく近づきがたかったといっている。

四月四日には更埴をまとめた創立大会が上田田劇場で開かれた。九月には白田町の佐久良座で、佐久支部創立大会が持たれ、そのどちらにも、くらは子は婦人弁士として参加している。この頃のくらは子は、いわゆる大会に花をそえるという役割以上のものをしていない。

くらの子の女性観が、どんなものであったかは、彼女自身の筆あとから知ることが出来る。大正十四年六月十日の「自由新聞」第一号に寄せた△婦人の自覚▽という文章が残っている。

世界拾六億人類ノ為メニ有ラユル人間ハ来リテ共  
ニ人間礼賛ノ叫ビラ聴ケ  
善キ日ノ為メニ

弁士名 全国執行委員長南梅吉君、栗須七郎君、村岡静五郎君、平野小剣君、坂本清作君、婦人代表高橋くらの子君、少年代表山田孝野次郎君、その他全国代表

ここでわかるのは、十三年暮に警視庁スパイ事件に関係し府県委員長会議で罷免されたはずの南梅吉、除名された平野小剣が、その肩書きのまま上京し、関東大会に出席していることだ。なお平野小剣は世良田事件の総指揮役に押されたことは、関東水平社が青年同盟（ボルス）に対立しアナキズムの影響が強いことを示している。長野県水平社と全国水平社の関係は、きわめて自由で、独立的かつ個人的であった。

三月二十九日には、南佐久郡栄村主催の水平社演説会で、くらは子は△私達の悲しみ▽と題して話している。この講演会が高野町栄座で開かれた。栄村小学校で小学二年生の子供同士のケンカから差別言辭が出て、同盟休校まで発展した闘争となる。この事件を受けた演説会である。県下で水平社が指導した同盟休校は、この闘争が最初である。朝倉重吉が中心になって闘いを指導した。

「自由新聞」は、水平社自由青年連盟の準全国機関誌で、アナ系である。

△近頃男女同権とか婦人参政権獲得運動とか婦人解放とか其の他婦人問題については非常に八金しく叫ばれるやうになりました。此のいつれの問題も男女人間の平等から起つたものであると思ひます。男は一度嫁すれば夫のいふ事ならば何でも御無理御尤もて承はり、夫のなすことならば何でも干渉し得なかつたのでありますが、是からの婦人は屈從屈服の鉄鎖を断ち切り、移り行く時勢に覚醒しなければなりません。今迄の婦人は余りに眠つてゐたからして、法律上からも教育上からも其他総ての点に於いて男子と同等視されてゐないのであります。

——殊に我が同人姉妹は、婦人としての圧迫と、部落民としての差別と、貧困の苦しみとの三重の重荷を背負はされて居るのであります。私達は早く此の苦境から脱しなければなりません。

私達の歴史を緋ければ、其の頁々には到底拭ふことの出来ない黒い血が流れてゐる事を忘れてはなりません。私達の全身を流れる血の中には積年の恨みを呑んで死んだ祖先の血が流れてゐる事を思はねばなりません。千有余年の間、九天廻る太陽も秋玲瓏の月も私達のためには照らなかつたのであります。爛漫と咲き誇る花も世に唐紅に包む紅葉も皆権門盛家のために世を飾つたのです。

私達の祖先は暗黒な社会に生れ、サンクに苦しめられてまた暗黒裏に葬られてしまつたのであります。噫！私達の祖父や祖母はあの地下にて如何に不合理な社会を呪つてゐる事でしょう。私達部落婦人は早く人間の本性に覺醒し、人類全体が本心に万物の霊長として尊敬し合ふ平等な社会の建設に、生命を投げかけて尽ませう。そして人間同士の闘争の絶滅をなさねばならないのです。

私達三百万人が「おエタ様」として尊敬される事によつて千年来の恨みが報いられ、三百万人全体が解放されるのです。そして私達の解放が日本のすべての階級の解放の時なであります。そこに私達婦人の新運命が開拓されるのであります。

私達もつとく真剣に此の問題に当らねばなりません。そして絶えず兄様方と歩調を共にし、お互に扶け合ひ教へ合つて近づきつゝある黎明の社会へ進ませよう。必ず近き将来に於いて太陽も月も、花も紅葉も、万人に同じほゝみをもつて迎へてくれる時が来るでせう。

終りに吾が兄弟姉妹よ、よき日を迎へるまで確つかりお願ひいたします。

文学的な文章である。観念的に流れているのは、部落婦人の自覚をうながしながら、部落婦人の中で自分の立場への自己認識が欠けていたからであらう。くら子には階級的視点が弱い。経済的苦勞を知らなかったからか。ひとたび目を転ずれば、彼女のまわりには、底なしの貧乏に苦しんでいる姉妹が絶望的にいた。そうした姉妹に、彼女の心はまだ開かれていない。

十四年九月一日号の同じ「自由新聞」で、くら子は△正義と人道の戦い▽と題して書いている。ここでは

△この文明の世の中で伝統的因習にとらわれて同じ人間を差別する、いまわしい事実は恥かしいことだと思ひます。この涙ぐましい事実を知りながら、ただあきらめていてよいでしょうか。今にどうにか

くら子をこのような行動に走らせたことについて、いざれ深めてみたいと思ふ。家庭と運動に対する不満、観念と心情の分裂が彼女を一瞬ヒステリックにしたのではないか。くら子自身は、中村のことについては、後に一言もふれなかったという。くら子はその後も、悪びれずに運動にかゝった。

大正十五年二月十五日、長野県水平社第四回大会が、北佐久郡本牧村望月川西座で行なわれた。依然として全国代表南梅吉、同平野小剣が名をつらねその他には米田富、長野本部からは朝倉重吉とくら子が弁士である。新聞報道は、当日の花形は小諸の高橋くら子と書いている。この日のくら子の演説を聞いたという柴田わしおさんの奥さんは、高等小学校二年生であったが、部落の女衆は、くら子のお話にみんな泣いたといっている。自分の女学校での差別的苦しみを語り、婦人の自覚と水平運動への参加を訴えたものだった。演説は非常にうまくいった。

大正十五年三月二十一日の佐久水平社大会は白田町佐久良座で開かれた。この会は千五百名を集めたもので、佐久地方の水平運動の盛んなことを物語っている。佐久執行委員長はボルの筆頭をつとめた高橋市次郎で、佐久

なるだろうというごく、的な考えをしていてよいでしょうか。——農村問題は鉞を持つている農夫自身が解決し、労働問題は労働者自身になってその解放を叫び、私達同人はそれ自身が団結して不合理な社会に向かつてあくまで正義と人道を絶叫し、幸福な平和な国の建設につとめなくてはなりません。水平社自由青年連盟(アナ)と水平社青年同盟(ボル)の対立を、くら子の文章からも察せられる。この年八月頃からアナ・ボル論争が激化していた。翌大正十五年に「自由新聞」に寄せたくら子の△姉妹よ! 団結せよ▽になると、ブルジョワ、プロレタリアなる階級用語を用いて論じるようになるが、階級的自覚というよりは人道的な思想を反映した文章である。

△昔大名や武士というのは百姓達が真黒になって働いたすべての生産物をしほり取りわがまま勝手なるまいをしたのです。——しかし私たちの血をしほりプロレタリアを苦しめているではありませんか——姉さん、妹さん、水平運動の前には、財産、地位、名譽等を夢見ていては駄目です。財産が何になりましょう。——社会に起つて愛と正義のために活躍するこそ最も尊敬すべき人間として眞の価値はそこにあると思ひます。——▽

くら子はアナ系の婦人闘士の紅一点であり、書いて弁じての活躍は、大正十四、十五年頃が最もはなばなしかつた。

女学校卒業と同時に、くら子は水平運動に

地方は彼の影響が強い。

この日、演説の一番をつとめた川西代表成沢量一が中頃で「社会制度組織が云々」で「弁士中止」で降壇させられた。高橋改造、同甲子二、同修峰と三人つづいて「中止命令」を出すと、小ぜりあいになり十分間休憩。その後くら子が演壇にあがったが、彼女は臨席の警察官に嫌味たつぷりと、「昨年皇太子殿下が奈良に行啓の際団旗に対して親しく敬礼された。殿下でさえ我等水平運動に対してかくまで思召され居るにも拘らずその下に使われている官吏や小使が同じ赤子である我々に対して差別的圧迫を加えることは大馬鹿である!」と叫び、聴衆を喜ばせたという。この佐久大会以後長野県水平社は、いわゆるアナ・ボル論争をむかえた。アナ系自身もボルの勢力拡大で、精神運動から権力闘争へ進展した。ボルシエヴィズムの滲透とその勢力拡大に伴つて長野県水平社は重大な段階をむかえた。

翌四月の内山事件は、警察権力を相手どつた大きな闘争である。「権力が勝つか団結が勝つかやろうじゃあないか」と警察署長が大言壮語した闘いであったが、水平社の団結が勝利した。この闘いを直接指導したのは高橋

生活のすべてをそいだかといふと、そうではなかった。全国大会でも、くら子は長野県水平社同人代表としてよく現われたが、運動の中心部に入って、運動を指導したことは一度もない。くら子自身の問題であるうがそればかりとはいえないのではないか。頭脳明晰で、積極的であつたくら子は、水平運動の中で、自己の能力を十分開花させることができなかつた。

大正十四年暮くら子は突然家族からも水平社同人からも姿を消して、大さわぎになる。朝倉重吉などは、長野県水平社の花形であるくら子が行方不明では、演説会の人集めも出来ない、家族の手前も青くなつた。小諸の水平社同人が手わけして探したが、一ヵ月間も行方がわからなかつた。

くら子は運動とはまったく関係のない男性(中村千市)と葵町(小諸)の市村館で一ヵ月同居していた。中村は自称大学生で、五拾銭を五拾円に偽造した男であつた。くら子が中村とどこで知りあつたのかわからない。新聞にも書きたてられ、両親は面目を失つたと、非常にくら子を責めている。中村は金が目的であつた。くら子と別れる条件で、くら子の父小重からかなりの金を出させたようだ。

市次郎である。婦人水平社は食糧調達と家族保護に活躍した。くら子も朝倉重吉と警察署長との立会い対決に出席している。くら子は下部の婦人水平社員との結びつきは弱い。くら子は闘争の指導者にはならなかつたが、結婚問題で女性が被害者の場合は、交渉の前面に立つて何回か闘っている。丸子町の結婚差別糾弾大会の時は、警官にとりまかれていてもひるまず弁じ、警察のデツチアゲと差別を徹底して衝いている。

6

昭和二年一月二十三日長野県小県水平社創立大会が、小県郡丸子町丸子劇場で開かれた。この大会はきわめて重要なものであるが、くら子自身の運命を決するものにもなつた。信濃同人会唯一の地盤である小県郡に水平運動が滲透したこと、チラシで読みとられることはアナ系の弁士をつらねながら、無産階級の闘いとして、単なる差別撤廃から階級闘争を訴えていることだろう。この大会は自由青年連盟の支持と無産政党的排撃を決定している。東京のアナキスト深川武と一緒に来長した川島松蔵が弁士をつとめている。川島はまたまた下宿の主人である深川武につれられて

信州に來た。彼は水平運動の活動家でない。演題は「所感」となっている。くら子はこのとき「婦人の立場から」という題で話している。弁説さわやかなくら子と、川島は対照的であった。川島はくら子の頭脳に惹かれ、くら子は川島の風貌に惹かれ、おたがいひと目ぼれという。

川島はダンディで、当時おしやれがはいっていた編上げ靴をいつもピカピカさせていた。背の高い色白のハンサムで、細かなことに気のつく、やさしい人だった。くら子はその後、川島に会うべく足しげく上京している。

闘争では瀬戸の国有林闘争を最後にボルは高橋市次郎、アナは朝倉重吉のもとに分れた。瀬戸の入会権闘争は両者が共に闘った最後の闘争である。指導者は、高橋市次郎と朝倉重吉であるが、中央からは米田富、平野小剣らがきている。農民組合も応援した。

第二回長野県水平社大会は二月に小諸キネマで開かれた。

アナ・ボルの対立の最も深刻な大会で事実上これを最後に長野県水平社は分裂した。中央からは両方のオルグが入って、役員の奪い合い、執行部も二つでき活動家は各々二つに

袂を分った。くら子は朝倉重吉のもとでアナとして活躍した。全国的には関東はアナ、関西はボルといわれている。

この年の暮十二月三、四日広島で開かれた第六回全国大会には、くら子も朝倉重吉と参加、長野県水平社代議員として発言している。十一月二十二日に北原泰作が天皇に直訴したが、この件でくら子は、二つの具体的行動を提案した。一つは第三師団軍法会議に対して抗議すること、一つは、家族を慰問することであった。くら子は会場で義捐金を募集したいと提案し、可決され、慰問金三十九円六十七銭を集めている。

くら子はかなり前から北原と文通しており、親しかつた。岐阜出身の北原も青年連盟に属していたが、くら子はどちらかというスタア好みであり、北原にひそかに心を寄せていた。北原のほうは別に意中の女性がおりに、眼中になかった。

くら子は、北原の自宅から押収された手紙から、小諸署に連行されている。「ちよつと用があるから署まで来てくれ」といわれ、そのまま二十九日間拘留された。警察の方では背後関係があるものとにらんだようである

つていった。活動をしている者もしていない者もある。深川の二階は、奥さんが世話す

きであったのでこうした下宿人でいつもあふれていた。川島もその一人である。深川の世話で時事新報の印刷工として入社した。彼は活動家でなく、くら子は運動の本を読んだがいつも『キング』などを読んでいた。

くら子の両親は、川島との結婚に反対だった。経済的に川島の家とくら子の家には差があった。しかしくら子は反対を押し切って上京し、昭和二年には本郷で同棲生活をはじめた。くら子は活動で長野と東京を行ったり来たりしている。家族や村の人には川島を、時事新報の記者だと言っていた。東京の学校に出ている村の婦人に、「わたしはいつも汽車は一等に乗るのよ」といい、くら子の負けずきらいが、虚栄を張らせた。水平社同人の妻たちは、「わがままだが、ざつとばらんで、かざるような人でなかった」と語っている。彼女の心中はいつも引き裂かれていた。真に確信のある思想をつかめなかったがために、くら子は死ぬまでこの分裂を生きた平凡な女性である。思想に賭けて生きぬけなかったところに、彼女の悲劇がある。ボルとアナの対

が、北原の直訴は彼一人の行動であった。

「気楽に生きてくれ、調べていることがわかれば、すぐ帰すから」と、拘留期間ギリギリまでとめられた。家族は新聞を毎日、記事が読めるように切つて、ハナ紙だといって差入れたという。くら子は何も口を割らずに出た。この時のくら子の闘いは、水平社同人から高く評価されている。

直訴事件が起こるに先立って、北原は軍隊内差別反対活動をした。入獄中の彼にくら子は差入れに行き、直訴文を書くに用いられた奉書紙を入れた。他にチャンスはなかったという。これはくら子が水平社同人である従兄の角一に話したもので、事実かどうかかわらない。

関東水平社青年連盟は、深川武をはじめとして、北原救援で活動を開始するが、その中にくら子も入っていた。家族へのカンパ活動や、北原直訴事件真相発表演説会を開いた。名古屋市の大黒座での大会の後、同人たちは北原が入っている倉倉裏で大演説会を開き、解放歌を高らかにうたい北原を激励した。

川島松蔵は福岡県早良郡内野村出身である。九州の者は上京するとみな深川武をたよ

立は、弟の利重との対立ともなつて彼女を一層不幸にした。

子どもが年子で生まれ実質的な活動が出来なくなる。くら子の両親は、子どもが出来てから、やっと川島との結婚をゆるした。くら子が北大井村の戸籍をぬいたのは、昭和六年二月二十三日であり、福岡内野の川島家に籍を入れたのは同月二十八日である。入籍のためくら子ははじめて川島家を訪れた。

昭和四年に長女敏子が生れ、五年には次女正子が生れた。くら子は、結核性腎臓で、深川の世話で本所の馬島側の診療所で腎臓を一つ摘出してゐる。その時、馬島に寿命を十年縮めたといわれたが、すでに病状は悪化の道をたどっていた。川島はくら子を非常にいたわっていたという。

川島が時事新報の第二次労働争議で首になり、一家は東京から尾久に引つ起した。川島は尾久の電気会社に、工事人夫として再就職する。はじめて出勤した日に、彼は事故死した。不幸はくら子のうえに、怒濤のようにおそいかぶさる。長男武美が三歳の時で、病身のくら子は三人の子どもをかかえて、途方に暮れた。川島の退職金九百円を持って結局三

人の子どもをつれて小諸に帰り、実家のそばに小さな家を借りて、母つねの世話になる。

小諸でのくら子は、すでに床についたきり一年後に亡くなった。昭和十五年三月で三十三歳の厄年であった。最後の言葉は「子どもたちをたのむ」のひとことであった。晩年の病氣と赤貧は、意地をつらぬき通したくら子の孤独を、測りしれないものにしてゐる。偶然部落に生を受けた一人の女性の、恨みを怒りを悲しみを、意地をはらねば生きられなかったもろもろを、痛覚する。健康にさえ恵まれていたら、貧しさを打ち砕いて生きることが、可能だったろう。またその中で、思想を鍛えることも可能であったろう。大胆さとして行動力をもつたら子であるから。三人の子どもをかかえ、くら子はどんなにか病氣を呪つたであろう。短かい生涯にくら子は水平運動の中でのみ自らを自由にしている。

▲くら子の晩年を紙面の都合で、はしょって書かざるを得なかった。くら子の短い生涯をとおして長野県下の水平運動の脈絡をおつてみたかったがそれも充分に出来なかった。次の機会にゆずりたい。この文書を書くにあたってお世話になった次の方々にお礼を申し上げたい。故高橋角一、高橋規子、高橋市次郎夫妻、中村繁夫妻、柴田よしを夫妻、深川としえ、不二夫、北原泰作、谷口修太郎